

[52] 第9回 世界バレエフェスティバル

～21世紀に分け入るバレエ～

2000年8月1日 東京新聞 夕刊

「世界バレエフェスティバル」が第九回を迎えた。三年に一度のイベントだから、第一回からほぼ四半世紀である。バレエ好きの人間にとっては三年を一サイクルとして時が流れるといっても言い過ぎではない。

トップスターが一堂に会するこのフェスティバルも、これまで毎回、大きな感動とともに未知の領域を切り開いて見せてくれたが、そうであればこそ、この先いつたいい何が残されているか、見るまでは予測もできなかった。

ところがAプロの最初の演目『チャイコフスキー・バ・ド・ドウ』が始まってしばらくした時、眼に涙がにじんできた。私の場合、踊りに誘われる涙というのは、物語や感情とは無縁の、いわば無色透明な感動である。

踊っていたのは、日本ではまだなじみの薄いミラノ・スカラ座バレエの二人である。長身のポツレにサポートされる小柄なコホウトコヴァが、言いようもなく繊細でしとやかだ。

踊りの動きには個性があって、同じ動き方をする人は二人としない。声と同じ、節回しと同じである。部分部分にその人ならではの味がある。これまで誰も見せなかった工夫が光る。それが折り重なって、その人の世界が出来上がる。舞踊の最

[52] 第9回 世界バレエフェスティバル

～21世紀に分け入るバレエ～

2000年8月1日 東京新聞 夕刊

大の感動は、その世界に触れることだ。

それを皮切りに、輝くばかりのダンスが次から次と繰り広げられた。新たな感動との出会いに懐疑的になっていた自分が嘘のようだった。あいかわらず強烈だが動きにふくらみの出たステパネンコに、いつそう男らしくなったウヴァーロフ。一皮むけて大きくなったオレリー・デュボンは、まるで体から光が飛び散るよう。練り上げた飴のよくな動きをするジル・ロマン。いつもながら舞台に現れた瞬間のオーラがすごいギエム。

だが首飾りを作るにも、中心に置きたい宝石はおのずから決まるもの。今回はA、B両プロを通じて、フェリとマラーホフが組んで踊った演目が、テクニクと表現すべての点で文句のつけようがなかった。このカップルはAプロで『椿姫』（ノイマイヤー振付）の再会のシーンを、Bプロでは『マノン』（マクミラン振付）の寢室のパ・ド・ドウを踊ったのだが、今世紀末の振付に特有の、奔流のように激しく留まるところを知らない動きをこれほどまでに狂いなく、完璧な音楽性と造形をもって実現できるダンサーは、この二人をおいて他にはいない。

もちろん同じ作品を他のダンサーが踊るのは何

[52] 第9回 世界バレエフェスティバル

～21世紀に分け入るバレエ～

2000年8月1日 東京新聞 夕刊

度も見たことがある。演劇的な資質では、『椿姫』を初演したハイデの表現は絶品だ。マノンの恋人、デ・グリユーの人物像や動きのスマートさでは、ルグリの演技も忘れがたい。しかし体の使い方では、今回のフェリとマラーホフを凌ぐものではなかった。

一方で才能が輝くとすれば、キャリアが重みを持つこともある。カルラ・フラッチの場合は、その人が舞台に立っていることそのものが奇跡だと言っている。ミラノ・スカラ座の主役を踊ってすでに半世紀である。基本に忠実な動きには無理がない。だから主役級の優れたダンサーが寿命が長いのは当然なのだが、それにしても孫をパートナーにカルメンを踊ったアロンソとか、このフラッチとか、自然の理をすりぬけるような踊り手がまれに存在する。彼女が若いムッルを相手に演じたのは、友人の息子シェリとの恋を自ら断ち切る五十女（それでも実際の彼女よりははるかに若い）その愛と絶望だった。バレエでも、年齢とともに深まるものがあることを教えてくれる舞台だった。

さて、世界バレエフェスティバルは、その時点での世界の頂点を見せてくれるだけでなく、バレ

[52] 第9回 世界バレエフェスティバル

～21世紀に分け入るバレエ～

2000年8月1日 東京新聞 夕刊

エの未来を提示してくれる。そういう意味で今回も刺激的に感じた演目は、いつもながらパリ・オペラ座のエトワールが踊った作品だった。いちばん古いはずのパリ・オペラ座がいつもいちばん先頭を走る。それがバレエの面白さだ。

一昨年の暮れにエトワールになったオレリー・デュポンがベテランのルグリとともに踊ったキリアン振付の『小さな死』。タイトルは性的なエクスタシーを意味するが、モーツァルトのピアノ協奏曲二十三番、二十一番の、あの果てしなく晴朗で透明な響きに、眼にも止まらぬピルエットと休まないジャンプが切りもなく重なり連なり、その極限の激しさのなかで人の体はもはやクラシック・バレエの常識から遠く離れ、不思議な柔らかさにと安らぎに浮遊しているように見えた。

浮遊するといえば、ガラでマラーホフが踊った『コート』は、ストロボの効果でダンサーが宙に浮いて停止したように見える。将来は、ダンサーだけが踊るのではない。テクノロジーもまた舞台の演技に参加するだろう。

バレエは確かなステップで二十一世紀に分け入って行きつつある。それが全公演を見終わった時の私の思いだった。